# 『延命地蔵経和訓図会』に関する一考察

## ――楽山上人説話を中心にして――

川野真帆

## 一、はじめに

蓬室有常著、松川半山画による『延命地蔵経和訓図会』[1]（以下『図会』と略す）は、嘉永六（一八五三）年に大坂で出版された『延命地蔵経』の注釈書[2]である。

『図会』は、『延命地蔵経』の経文を六二に区切り、経文の語句に注釈を加えたものである。語句の注釈数は二八五におよび、『延命地蔵経』の注釈書の中では最も多い。また、『地蔵菩薩霊験記』『元亨釈書』[3]などから、経文に関連する四一話の地蔵説話を紹介している。

そのうち二話は、楽山（ぎょうざん）上人の説話である。いずれも、楽山上人の功徳を称える内容である。そのあらすじを記しておく。

I　ある男が、日頃、鼠をなぶり殺しにしていた。その男が病にかかり、伏していると夢に鼠が現れ、男の足の指を噛む。その夢は毎晩続き、痛みは体中に広がり耐えがたいものであった。その頃、男は楽山上人の噂を聞き、八尾へ赴く。楽山上人の利益により鼠は成仏し、男の病は癒えた。（中巻・五丁裏から六丁表）

II　三途の苦悩を救う／名号の札を飲ませ、安産させる／足の悪い者が、立てるようになる、という三つの抄録[4]。楽山上人が亡き母親のために修行した。ある夜、夢に僧が現れ、亡き母親が隣家の子供として生まれ変わるというお告げを受ける。生まれた子には、亡き母親と同じ位置にほくろがあり、楽山上人は夫婦から子を譲り受けた。（中巻・一七丁裏から一九丁表）

楽山上人は融通念仏勧進の高僧として、『河内史談』（西岡三四郎・一九五一）、『八尾市史』（八尾市史編集委員会・一九八八）などに取り上げられている。また、一九九九年には、八尾市立歴史民俗資料館で、「楽山上人と幕末の八尾」という特別展が開かれている。そのときのパンフレットから、『図会』に紹介されて

いる楽山上人の説話の原資料が、上人自筆の記録書として現存することを知った。今回は、この二話の説話を取り上げ、説話の伝播という視点から『図会』がもつ意義を考察してみたい。

## 二、楽山上人

楽山上人については、八尾市立歴史民俗資料館編『融通念仏行者　楽山上人と幕末の八尾』（一九九九）に詳しい。ここでは簡単に紹介する。

楽山上人は、文化七（一八一〇）年に泉州日根郡谷川村（現・岬町多奈川谷川）の百姓の子として生まれた。少年時代は法を求め真摯に学び、文政一二（一八二九）年に河内国若江郡木戸村（現・八尾市東本町）の融通念仏宗清慶寺に入寺した。無住であった清慶寺は荒廃していたが、住職として力の限りを尽くし、「八尾のお上人」「生き地蔵様」と呼ばれるようになった。弘化三（一八四六）年に亡くなるまで、八尾を中心とした河内領域と大坂市中で活動を行った。

楽山上人の活動した時代は天保期（一八三〇～一八四三）前後である。楽山上人は亡くなるまでに、六万人以上の人々を名帳に加え、日課念仏を授けたとされる。また、清慶寺周辺の村や出先の村の依頼で、雨乞いや虫送りの祈祷を行い、数々の利益を人々に授けたという。

このような楽山上人の功徳譚が、上人自身によって『清渓随筆』[5]（清慶寺蔵）にまとめられている。今回、この貴重な資料を拝見する機会を得た。

『清渓随筆』の全てに目を通すことはできなかったが、『図会』に紹介されている楽山上人の母親の再生譚に関する記録を確認することができた。以下、『清渓随筆』から、母親の再生譚に関する記録部分を掲げる。

本稿における本文引用については、適宜句読点濁点を加え、改行した。また、ルビはすべて省略した。なお、①②の表記の違いは、本文のままである。

① 六月十四日ノ夜、夢定ノ中ニ而、母東隣家ノ婦人ノ胎内ニヤドルト感得シテ、其時ハ理慶尼ニ尋サセ置テ、予別行ナレバ、直々ニ面談モ為ガタクシテ、今七月四日ニ右ノ婦人ハ、トキト云。予前ニ召寄教ヲ論ス。昔ノ上人大徳モ出生シ給フ。皆衆生済度ノ為ナリ。此度、汝カ腹ニ胎ルモ予ガ存心ナルニナラバ、定テ衆生ヲ済度シナント憶ヒケルホドニ、昔シモ今デモ志ノタル女人ハ、仏神ニ誓言シテ悪人女人タスカルホドノ子ヲアタヘサセ給ヘト、祈リテモフクルナリ。汝祈ラズシテ一子ヲ得タリ。此度ハ出生誕生ノ后ハ、仮令男子トモ女人トモイトワズ予ニタマエ。弟子ニシテ法門ノ修行サセ度ト憶ヒナン。サアレバ、九族天生スルトテ仏果菩提ニイタ

ル。況ヤ其母ノ往生、父ノ成仏ハ疑ヒナシ。喜フベシト申シケレバ、婦人ノ曰ク、此間理慶様ヨリ承リ聢ト妊身トモ覚エザリシガ、比ロデハ我身ニ覚エ、此由ヲ夫ニ語リ、夫モ共ニ喜ビ先年死タル娘アレバ、今コノ男子デサヱ御弟子ニツカワシタクト申サレルホドノコトナレバ、此度ハ身モ精進シ大切ニ出産スル様ト夫モ私ヘ申サレマスル。

予コノ言ヲキヽテ、サテサテ安心セリ。春三月ヨリ、予母何ノ趣ニ堕シナント心ニカヽリ、昼夜地蔵尊ニ憑ミ、若モ三悪道ニ落ナバ、菩薩ノ大願力ニテタスケ給ヘ、往生極楽或ハ人天ニ生ヲウケルヲアタヱタマヱト、心苦ニ憶ヒシガ母ノ往処イヨイヨ人間ニ生ヲ得タルト憶ヘバ、歓喜ノ涙ダニ目ヲアカクスルナリ。実ニ菩薩ノ大恩洪海ノ願力憶ヘバ、難有ヒカナ。『清渓随筆』第二（二七丁表から二八丁表）

② 六月廿三日、在家保右衛門妻トキ貞蔵母、台所に来りて理慶老尼に謂ていわく、昨年死去なされし隠居様の身肌になんぞ、しるきあざでもなしやありや。理慶のいわく、御隠居死の前に一日病中にてあり。其死后に、大小便少し漏ありしにより、臍より下裾をまくり掃除をするに、臍の右の方に黒きあざあり。夫より外に、しるきものなるがなきかしらずといふ。ときのいわく、五月廿七日夜半に、故隠居様我か肩をしかとつかまえ、三度ふりおとしてありありと見えける其時に、隠居様いわく、我此家にやどり生てきたり。うたがわずに大事にしてそだてくれば、と仰られて、けすごとくにうせり。其時に仰られけるは、其しるしあるほどに姿からだをよくみよ、と仰られあり。翌朝貞蔵の身をあらためて見るに、痣この処に少しうすいろのあざに、にたるものあり。此より外にしるきもの少もなく、実に奇麗な生れなり。今理慶様の咄しと都合せり。このこと先日から咄したくあれど、秋中野もせわしくて今日まで延引いたしたり。さあれば、実に貞蔵は故隠居様の後見うたがいなしといふてあられける。

この旨、予に理慶かたらふをきゝて、夫は不思議や。昨年から其元の服へ隠居胎るとや、きかせても俗人のことなら、やはり少の疑もありや。夫中へ地蔵菩薩の御慈悲力にて、かくまでのうたがいをはらせとて、夢に見しことかなと、身に歓喜あまり略して記すもの也。『清渓随筆』第三（八七丁裏から八八丁裏）

①では、楽山の母が隣家に生まれ変わると分かり、隣家の夫婦に、子が生まれたならば弟子にしたいと要請して同意を得る部分が記されている。そして②で、その続きが記される。隣家に子が生まれ、その母親の夢に楽山の母が現れ、大切に育ててくれという。子の母親は、理慶尼から楽山の母には臍の右に黒子があった

ことを聞く。生まれた子にも同じ位置に黒子があったため、隣家の夫婦は子を楽山に譲るという内容である。

この母親の再生譚については、「先に記したる貞蔵のこと、あらあらこの人等に披露しければ、皆歓喜感心せり」[6]という記述があるので、楽山上人が、行く先々で人々に母の再生譚を話して聞かせ、その話が噂として広まっていったと思われる。

楽山上人は、清慶寺を中心とした八尾や活動地域周辺で「生き地蔵」として崇められていた。したがって、母の再生譚は、程を経ず大坂市中まで伝わり、『図会』の著者の知るところとなったのであろう。

さて、楽山上人が亡くなったのは弘化三（一八四六）年。『図会』が刊行されたのは嘉永六（一八五三）年だから、没後六年である。楽山上人が活躍した時期との近接状況から考えると、著者は直接、楽山上人の法話を聞いていたかもしれない。[7]

間接的にその再生譚を聞いたのだとしても、時も場所も近いことでもあり、印象深いものだったようである。そのため、著者は『図会』に、楽山上人の説話を取り入れたのだろう。

## 三、『図会』に引用された楽山説話

楽山上人の母親の再生譚は、『図会』（中巻・一七丁裏から一九丁表）では、次のように紹介されている。

爰に一つの物語あり。前にも記す。鼡の死霊を得脱せしめ給ふ八尾村の楽山比丘と申けるは其頃世にこぞつて地蔵菩薩の化身なりと道俗男女群参せり。実に近来稀なる高徳なり。中にも其利益を蒙たる者は枚挙するにいとまあらず。亡者の為には三途の苦悩を救ひ給ひ、生霊死霊或は難産気付て、数日悩みて産かぬるに、其名号の札をのませは即座に平産なし、其名号の札を手ににぎりて生れ出しと眼前に見る所なり。

爰に勢州山田の町に、此比丘の利益にて膝行の足の立しことなど名高き霊験なり。然るに楽山比丘は、性質孝心深くましまして父母に孝養し、師長によく事へ給ひて其行状の正しき事いふべからず。

或とき母堂見まかり給ひて後、楽山つくづく思ひ給ふに、我菩薩の加被力によつて斯く衆生を済度すると雖ども母の末世をしらざらんは、いと心苦しく殊に女人の罪深く、仏もなげき給へることなり。さらば、母の滅罪を念じ来世の程をも告給はん事を祈らんとて、三尺三寸の地蔵尊を彫刻して三七日本願経を修行せられしが、或夜夢中に美麗なる僧来り給ひて、善哉々々。汝が母の追悼をいとなみ、かつは来世を知らんとならば、同村百姓安右ヱ門が方に出産する者こそ、汝が母ならめと告給ふ。[8]

楽山大によろこび、早速に安右ヱ門に面会して懐妊の様子

を尋給ひて、若懐妊せはしらすべしとありければ、ほどなく妊身して玉のごとき男子を生めり。早くも楽山比丘に告知らせければ、楽山比丘大に悦び、是我母なりしゆへにもらひ受度よししきりに申されば、安右ェ門夫婦只忙然として、如何なる所謂にて、かゝるおもひよらざること仰らるべきぞ。楽山比丘、ふしん尤なり。我母の来世をしらん為、地蔵尊を祈念しけるに、夢中にかくかくの御告ありし故に、斯申なりと仰られければ、夫は上人の仰なりともたしかなる證拠あらば、兎も角も任し奉るべし。其證拠上人重て仰には、其證拠には、則小児の右の脇腹に一つのほくろ有べし。改め見よと仰に、夫婦小児を見るにはたして印ありければ今は疑念を晴、上人に奉りぬ。此うはさを聞知る者は実にも上人は地蔵菩薩なりと感ぜぬ者こそなかりける。夫より諸人益帰依せり。（傍線　川野）

楽山の功徳譚は、iii「此うはさを聞知る者は」というように、噂話として紹介されている。もちろん、楽山自筆である『清渓随筆』に記されている内容の方が、『図会』に紹介されているものより詳しい。例えば、『図会』には「安右ェ門」の妻の名や、楽山上人と夫婦の間を行き来する理慶尼は出てこない。また、隣家の妻が、亡き楽山の母親の夢を見る場面もない。

しかし、楽山上人が亡き母のために修行を行い、夢でお告げを受け、そのお告げのとおり、亡き母と同じ位置にほくろのある子が生まれ、楽山上人が子を譲り受けるというストーリー展開は、『清渓随筆』と同じである。当時、楽山上人の母親の再生譚は、ほぼ正確に伝わっていたようである。

また、ii「其利益を蒙たる者は枚挙するにいとまあらず」という記述は、著者が『図会』に紹介している巷間説話以外にも、楽山上人の利益譚を知っていたことを示唆するものである。事実、『清渓随筆』には、病気や体の障害を完治させたなどの利益譚が記録されており、楽山上人が多くの人々に利益を授けていたことが分かる。これらの利益譚が、噂となって存在したことは、十分に推察できる。

さらに、i「其頃世にこぞつて地蔵菩薩の化身なりと道俗男女群参せり」、iii「上人は地蔵菩薩なりと感ぜぬ者こそなかりける」とあることから、当時、楽山上人が「生き地蔵」として人々に認識され、敬われていたことがわかる。

『図会』に見られるこのような記述は、楽山上人の活動地域で起こった噂が、活動地域を越えて知れ渡っていたということを裏付けるものである。

## 四、『延命地蔵経和訓図会』の特質

以上、『清渓随筆』『図会』に見られる楽山上人の母親の再生譚

の記述から、

① 当初、楽山上人自身が、再生譚を人々に話して聞かせていたこと。

② 楽山上人の母親の再生譚は、八尾だけではなく大坂にまで伝わっていたこと。

③ その内容は、ほぼ正確に伝わっていたこと。

が確認できた。したがって、『図会』は、楽山譚がどこから生まれ、どう広まったかを跡付けうる貴重な資料であるといえる。

また、楽山上人没後も『清渓随筆』などを基にした法話があったであろう。そうすると、楽山上人の利益譚は、風化されることなく語り継がれていたと考えられる。その楽山譚が『図会』に取り上げられ、出版メディアに載ったことは、説話の伝播に一つの画期をもたらしたといえる。

つまり、楽山譚が、大坂という地域を越え、三都に知れ渡る機を得たことになるのである。『図会』は、『延命地蔵経』の注釈書であるとともに、説話の普及の一助となっているのである。

**注**

(1) 『延命地蔵経和訓図会』の書誌は、次のとおりである。

①巻数・形態　三巻三冊

②表紙　柿色

③寸法　二五センチ×一七・八センチ（上巻）
二三・九センチ×一七・六センチ（中巻）
二四センチ×一七・二センチ（下巻）

④外題　「地蔵経和訓図会上（中・下）」

⑤見返し題　「延命地蔵経和訓図会」

⑥見返し　題省略　「浪華蓬室主人著述　仝　松川半山画図」「書肆春星堂
墨香居」

⑦柱　「地蔵経和訓巻之上　一（～廿六）」
一、「地蔵経和訓巻之中　一（～廿九）」
二、「地蔵経和訓巻之下　一（～卅三）」

⑧丁数　上巻二七・五　中巻二九・五　下巻三三・五（金沢大暁烏文庫蔵は三五・五）

⑨刊記　ア・東京大学・仏教大学・龍谷大学（眞鍋文庫）蔵
「編述　浪速　蓬室主人有常印　印／画図　仝　松川半山霞居印（翠栄）／地蔵菩薩霊験記図会前篇六冊　蓬室有常著　松川半山画図／血盆経和訓図会全三冊　地蔵菩薩和讃図会全二冊／十界一心乃図解全部五冊　作者画工仝上　（本の宣伝文略）／嘉永六年丑九月発行／摂津書舗春星堂墨香居梓」

イ・金沢大学暁烏文庫蔵
アと同じ。
ただし、三四冊（二丁分）の広告が刊記の前にある。

ウ・内閣文庫蔵
「嘉永七年甲寅五月／備後町三丁目／作者　大和屋太

助／大阪書肆　高麗橋一丁目藤屋善七」
エ・国立国会図書館・成田山仏教図書館蔵
「嘉永七年甲寅五月　新刻／皇都書林／六角通御幸西へ入　小川多左衛門／寺町通三条下ル町　蓍屋宗八／三条通御幸町角　吉野屋仁兵衛」

刊記については現在のところ、嘉永六年版のものが二種、嘉永七年版のものが二種、計四種確認できている。

なお、本稿で引用した『図会』の本文は、内閣文庫蔵のものである。

(2)　『延命地蔵経』の注釈書の研究については、南門明定氏「『延命地蔵経』の研究—『延命地蔵経』の注釈書とその分科—」（『高野山大学密教学会報』一七・一八合併号・一九八〇・三）に詳しい。

(3)　『図会』に紹介されている説話を確認するため使用したテキストは、『十四巻本地蔵菩薩霊験記上下』（大島建彦監修・二〇〇二～三・三弥井書店）、『元亨釈書』（国史大系三一）などである。

(4)　三つの抄録を含めると、『図会』では楽山上人に関わる五つの噂話が紹介されている。ここでは抄録は数に入れず、巷間説話は二話とした。

(5)　『清渓随筆』は、楽山自筆の年譜で、全七冊。楽山の行動や考えを知る根本資料とされる。内容については、八尾市立歴史民俗資料館編『融通念仏行者　楽山上人と幕末の八尾』（一九九九）に詳しい。母親の再生譚は、第二・第三に見られる。

『清渓随筆』第二は、竪帳・一冊、二五・四センチ×一七・五センチ、全四五丁。天保一二年一二月二二日から天保一三年一二月までが記されている。

『清渓随筆』第三は、竪帳・一冊、二五・六センチ×一七・五センチ、全九六丁。天保一四年正月から一二月までの随筆である。

ともに、一丁は約二〇行×二八字である。

『清渓随筆』には、病を治す話や女人泰産の話など、いくつもの霊験譚が記録されている。『図会』に紹介されている、鼠を成仏させる話や抄録部分が、どのように記録されているのかは確認できていないが、これら上人の功徳譚の原資料にあたるものが、『清渓随筆』に記されている可能性は高いと思われる。

(6)　『清渓随筆』第三（八八丁裏）による。貞蔵とは、隣家に生まれた子に付けられた名である。

(7)　『図会』（中巻・五丁裏～六丁表）で紹介されている楽山上人の功徳譚部分では「近頃天保年中に河内国八尾村に楽山比丘といへる人おわしける」というように、楽山上人の活動時期・場所が詳しく記されている。このことから、著者にとって楽山上人の再生譚は、記憶に新しいものであったと推察できる。

(8)　『清渓随筆』では、「三尺三寸の地蔵尊」、「三七日本願経を修行」したという記述は確認できていない。

しかし、楽山上人の弟弟子にあたる黙乗によって、天保一五（一八四四）年に記された、『再生貞蔵傳』（竪帳・一冊・全九丁、二四・六センチ×一七・八センチ）には、「長三尺三寸ノ地蔵菩薩ノ木像ヲ刻マシム」と記録されている。この書は、楽山の養子になった貞蔵についての聞書で、第三者が書いた楽山関係の伝記で最も古いとされる。

『図会』に紹介された上人の功徳譚が、記録されている内容とほ

ぼ同じであることは、上人が活躍していた時期と『図会』が執筆された時期が近いことを表しているのではないか。

貴重な資料の閲覧を許可してくださった清慶寺・八尾市立歴史民俗資料館に、厚く御礼申し上げます。